

## 美の心理学

コーディネーター 長谷川寿一

私たちは日々、美しさを感じ、美しさを愛で、美しさを評価し、美しさを求める。美をめぐるは、われわれの心のはたらきの三大要素、認知（知）、感情（情）、動機づけ（意）が総動員されている。したがって、美は心理学にとってきわめて重要なテーマであり、「美の心理学」があつてしかるべきなのだが、これまで「美」が心理学の表舞台に出ることはほとんどなかった。わが国の心理学事典のうち、最も定評があり、かつ大部で最新の『心理学事典』（平凡社）で探してみても、主項目名のみならず索引にも「美」が出てこない。あたかも、現代心理学という学問領域には、美が存在しないかのようである。

このようなすぼっと空いた空白地帯を埋めんとばかり、心理学界きつての碩学、渡辺先生が筆をとったのが本書である。渡辺先生のご専門は動物心理学あるいは比較心理学であり、膨大な数の動物実験を通じて心や認知の本質に迫ってこられた。本書でも、渡辺先生ご自身の動物実験美学とでもいうべき研究が数多く紹介されている。しかし、本書は動物の話にとどまらず、経験科学としての美学、すなわち美に関する実証的研究を広く俯瞰できるような構成になっている。

第1章「経験科学としての美学の成り立ち」では、実証的美学研究の学史と現在の研究動向が述べられている。歴史を語るとき、渡辺先生の筆はいつも軽やかであり、博識さと先生の熱い思いが交

差する。本章でも、普通であれば退屈になりかねない、カントやフェヒナーの主張や論考が平易に解説され、すどんすどんと理解できる。フェヒナーからはじまる美の実証研究は、バーラインの新実験美学に引きつがれ、動物実験も含めた研究が可能になった。ただし、それが心理学のメインストリームにならなかったことは、上述のとおりである。現在、経験科学としての美学は、進化美学、神経美学、統計美学といった領域で展開され、第2章以降でより詳しく論じられる。

第2章「美の進化的起源」では、いわゆる進化美学の概要が述べられている。本書の冒頭に書かれているように、渡辺先生は2012年に「性選択としての美」という学際的な国際シンポジウムに参加し、進化美学研究の最先端の議論に参加している。美が自然淘汰を受けて形成されたとしたならば、美には普遍性があると考えられるが、実際にはそのようなことはない。普遍文法や普遍道徳と同じような普遍美は、おそらく存在しないのだろう。渡辺先生は、ピンカーのチーズケーキ仮説（過去の適応の副産物としての美）も紹介しているが、それに賛同しているわけでもない。「動物の審美眼」として引きあいに出されるのは、性選択におけるメスによる配偶者の選り好みであり、本書でも多くの研究紹介がなされているが、それもまた人間の審美観全般を説明するわけではない（男性による女性の魅力度の評価はかなりの程度説明できるかもしれないが）。進化をふまえて、渡辺先生が強調するのは、美の主要な機能としてメッセージ性があるという点である。動物たちの美はメッセージ・アートであるという指摘はそのとおりで、芸術の起源としては情報伝達があったという指摘は重要である。

第3章は、近年発展が著しい、「美の神経科学」、別名神経美学に関する章である。動物を用いた快感の脳内報酬系は、中脳の腹側被

蓋から大脳の側座核に至る経路に対応すること、また人間のコカイン中毒やギャンブル依存では側座核や眼窩前頭野が活動することが知られていた。神経美学の創設者のゼキは、美しい絵画を見せると大脳の内側眼窩前頭皮質と前帯状回が活性化することを明らかにし、美と快感の関連を明らかにした。渡辺先生の解説は、音楽や文学、数式の美しさの神経美学まで展開していく。さらに瞬時の美的感動や美的評価が、DMN(Default Mode Network)と呼ばれる脳のデフォルト状態の活動に対応しているという最近の研究や、脳損傷が芸術活動にどのような影響を及ぼすかという神経心理学的研究についても興味深く語られている。

第4章では、「動物たちの芸術的活動」という、いわば芸術の比較行動学、比較認知科学研究が解説される。動物がつくる美しい造形物、特に鳥の巣や歌は、人の目や耳にも美しく映り響く。自然がつくり出す普遍的な機能美もあるが、ニワシドリの巣のように独特の装飾美もある。複雑な東屋をつくるニワシドリの脳は、東屋をつくらぬ近縁種の脳よりも大きいとのことであり、装飾的創造活動が脳の進化を促したことが示唆され興味深い。この章で紹介される動物たちの技能は、たしかに人間の芸術活動と重なる部分があるが、渡辺先生は動物の「芸術活動」の起源が求愛である以上、機能的自律性に欠けること、すなわち芸術のための芸術ではないとその限界を示している。人間の芸術活動は、もはや異性を惹きつけるためのものではないということである。

第5章「動物に芸術を教えられるか」は、動物の描画や、音楽に関する研究の章である。チンパンジーは自発的に描画するが、具象画は描けない。ゾウは具象画を描くのだが、実はゾウ使いの指示に従っているだけであり、残念ながらそこには創造性はない。音楽のほうでは、最近、スノーボールというオウムのダンスが話題を呼ん

でいる。ヒトの音楽に自分の身体の動作をかなりの確に同期することができ、音声模倣の一例だと考えられている。しかし、動物は作品をつくるにしても、作品の価値を評価し、楽しむことはしない、と渡辺先生はクギを刺している。ここでもまた、動物を鏡にすることによって、人間の芸術活動が社会的活動という特性をもつことが浮き彫りにされている。

第6章「動物は人間の芸術を見分けられるか」は、渡辺先生の十八番の領域である。ご存知の方も多いと思うが、渡辺先生は、モネとピカソの絵をハトが見分ける能力をもつことを示し、1995年に日本初のイグノーベル賞を受賞した。渡辺先生が目指すのは、動物でも何々ができるということだけを示すのではなく、その認知神経メカニズムの解明である。画風の違いがわかるとしたら、その手がかりはなにか、それはヒトが用いる手がかりと同じか違うのか、と知的な謎は深まっていく。さまざまな動物種で、多様な刺激についての弁別実験がおこなわれていることに驚かされるが、これらの研究を通じて、動物たちの「世界観」と、種ごとの認知神経システムの固有性が解明されるのである。

第7章「動物はヒトの芸術を楽しむか」では、単なる作品の弁別を超えて、動物が作品に選好性を示すか、作品によって学習を促進できるかが論じられる。専門用語でいえば、種を超えた感性強化に関する領域で、いわば動物美学の序論である。研究はまだはじまったばかりなので、これからが楽しみな領域であるが、応用面では動物の飼育環境の改善や福祉につながる事が期待される。

最後の第8章で、渡辺先生は「洞窟絵画の謎」に迫る。洞窟絵画は、人間の芸術活動のルーツを探るうえで、たいへん貴重な文化財である。私も南西フランスの真っ暗な洞窟の奥深くで、実物のマンモス像を見学したが、作品の躍動感には心打つものだった。しかし、

このような洞窟絵画についてはまだまだ多くの謎が残されている。なぜ洞窟深部で描いたのか、呪術性はあるのかないのか、なぜ大型獣ばかりなのか、長年様式が変化しないのはなぜか、などなど、それだけでも1冊の本になるくらいである。渡辺先生は、遺跡として残らない洞窟絵画以前の美術として、性選択と関連するボディ・ペインティングをあげ、そこで磨かれた技法が洞窟絵画で生かされたのではないかと推察している。このあたりは、検証が難しいが、小規模伝統社会（狩猟採集社会）における芸術活動の野外研究のメタ分析が期待される分野である。

本書では、渡辺先生の名ガイドに導かれ、読者は、人間の芸術活動の萌芽が他の動物においてどのように表れるか、その機能はなにか、他の動物には見られない人間の芸術の固有性はどこにあるのかを、知識として学び、自身で考えることになる。私は、現在、渡辺先生と「共感性の進化・神経基盤」というプロジェクトで共同研究をおこなっているが、共感性についても、芸術（あるいは美）と同じように、動物との連続性とヒトの固有性の両面を浮き彫りにする作業が重要である。動物の心理・行動の研究は、それ自体でも意義があり、奥行きも深いのだが、大局的には、「人間とは何か」、「われわれはどこからきた、何者なのか」を考えるうえで、不可欠な研究分野なのである。読者の皆さんにも、ぜひ、本書を読みながら、自分のルーツと、現代人の生物としての特別さに思いを馳せていただきたい。